

太平洋の向こうに見えたもの

氏名 トーンレック ウィパーウィー
日本語・日本文化研修留学生 タイ

タイから来た留学生として、日本での一年は、私の人生において特別な意味を持つ時間だった。日本に来る前の私は、未来のために必死に勉強していた。小さい頃から日本語に興味を持ち、アニメや音楽を通してこの言語に惹かれていった。そしていつかこの国で実際に暮らしてみたいという夢を抱くようになった。そんな私にとって、留学生として日本に行けることが決まったときは、夢が現実になった瞬間だった。

最初に「和歌山」という地名を聞いたとき、正直に言えばどんな場所かまったく想像がつかなかった。インターネットで和歌山の気候や自然、観光地について調べてみたものの、一年間の暮らしがどんなものになるかまでは想像できなかった。ただ、この町の気候が自分に合っていそうだという感覚があり、それだけを頼りに新しい生活に飛び込んだ。

空港に降り立ち、飛行機の窓から見えた太平洋が、私の目に最初に飛び込んできた。大きな海、そのむこうに広がる島国。あの海を越えて私は自分の国を離れ、新しい場所に来たのだという実感が胸を打った。

和歌山での生活が始まってすぐ、私は温かく迎えられた。先輩の留学生、日本人の学生、Win Concordの方々、皆さんが親切だった。初めての土地、初めての文化、そして言葉の壁もあったが、支えてくれる人たちの存在があったからこそ、私は少しずつこの町に馴染んでいくことができた。

その中でも、留学生のある友人との出会いが私の留学生活に特別な彩りを与えてくれた。初めは一緒に和歌浦への小さな旅行だった。最初はお互いに遠慮していたが、同じ景色を見て、同じ体験を重ねるうちに自然と心が近づいていった。それからというもの、週末には一緒に出かけたり、授業の合間に話したりと、友人の存在が私の日本生活を豊かにしてくれた。



和歌山にはたくさんの魅力的な場所があった。神社やお城、温泉、カラオケ、そして何よりも私が惹かれたのは海だった。時間があるときは、よく和歌浦、加太、白浜などの浜辺に出かけた。そこで静かに海を眺めたりする時間は、何ものにも代えがたい癒しだった。

私が見てきた太平洋は、場所によって水の色が異なっていた。深い藍色の海、濃い緑がかった海、そして白浜で見た明るい水色の海——それぞれの浜辺には、それぞれの美しさがあった。空の色と混ざり合って変化するその景色に、私は何度も心を奪われた。夢中でシャッターを切り、スマホの容量がいっぱいになるほど写真を撮った。SNS に投稿することで、その一瞬一瞬を記録に残し、遠く離れた家族や友人にも共有した。

和歌山での生活は、忙しくもあったが、心が落ち着く時間でもあった。タイでの生活は

競争が激しく、常にしっかりしなければと自分を追い込んでいたが、ここではゆったりとした空気の中で、自分らしさを取り戻すことができた。

そして、自分で何かをやってみたいという気持ちが芽生え、アルバイトにも挑戦してみることになった。私が働くことになったのは、ある靴屋だった。最初は不安しかなかった。接客も日本語も自信がなく、本当にできるのだろうか悩んでいた。そんなとき、面接で出会った店長のまっすぐな目に、勇気もらった。靴屋の仕事は、ただの接客ではなく、販売の世界だった。お客さんも、スタッフも、一人一人に物語があった。ミスをするのも何回もあったが、和歌山の人たちに助けられて、毎日を頑張ることができた。それら全てが、私にとって初めての経験だった。繁忙期には、体力も気力も消耗するような忙しさで、店内を何度も走り回るほどの混雑ぶりにもかかわらず、店内では「すみません」「ありがとうございます」という言葉が何度も飛び交い、私自身も「ありがとう」をたくさんもらった。働く中で、上下関係やチームワーク、お客さまとの関係性など、多くのことを学んだ。そして、それらの経験は日本での生活をより現実的で価値あるものにしてくれた。

一人暮らしの中では、時折寂しさを感じることもあった。特に、友人を空港まで見送りに行った日、帰りの車の窓から見た太平洋の景色が、胸に深く残っている。その友人が飛行機に乗ってこの海の向こうへ去っていったことを思いながら、私は静かにその広がりを見つめていた。



楽しいときも、悲しいときも、私は太平洋を見つめてきた。その海は、いつも変わらずそこにあって、私の心に語りかけてくれた。スマホの中には、和歌山の海の写真があふれている。どれもが思い出とつながっていて、私の日本生活の証でもある。和歌山という町は、風景や自然だけでなく、人とのつながりや、自分自身の変化を感じさせてくれた場所だった。和歌山のことを思い出するとき、まず最初に思い浮かぶのは、出会った人たちのことだ。太平洋のむこうから来た私は、ここで大切なものをたくさん見つけた。いつかまたこの海を越えて戻って来る日があっても、きっと和歌山の思い出は、私の中でずっと生き続けるだろう。

สิ่งที่ฉันมองเห็นจากฟากฝั่งของมหาสมุทรแปซิฟิก

วิภาวี ทองเล็ก

นักศึกษารั้ววิชาและวัฒนธรรมญี่ปุ่น ประเทศไทย

การได้มาใช้ชีวิตเป็นนักเรียนแลกเปลี่ยนที่จังหวัดวาคายามะ ประเทศญี่ปุ่น เป็นบทหนึ่งของชีวิตที่ฉันจะไม่วันลืม แต่เดิมฉันเป็นเพียงคนหนึ่งที่มีความฝันอยากมาลองใช้ชีวิตญี่ปุ่น และได้พยายามอย่างเต็มที่มาตลอดเพื่อที่จะไขว่คว้าความฝันนั้น แม้ในตอนแรกจะไม่รู้จักวาคายามะเลย แต่เมื่อได้มาสัมผัสจริง ฉันก็ได้พบกับเมืองที่อบอุ่น เงียบสงบ และเปี่ยมด้วยผู้คนที่มีน้ำใจ ไม่ว่าจะเป็นเพื่อนนักเรียนแลกเปลี่ยน อาจารย์ หรือคนในท้องถิ่น ทุกคนล้วนมีส่วนทำให้ฉันค่อย ๆ รู้สึกเป็นส่วนหนึ่งของที่นี่

หนึ่งในสิ่งที่ฉันประทับใจที่สุดคือ ธรรมชาติ ซึ่งกลายเป็นที่พึ่งทางใจของฉัน มหาสมุทรแปซิฟิกที่ทอดยาวอยู่เบื้องหน้า มีสีสันหลากหลายตามแต่ละชายหาด และในทุกการเดินทาง ฉันมักถ่ายรูปเก็บไว้เป็นความทรงจำ ไม่เพียงเพราะความงามของทิวทัศน์ หากแต่เพราะแต่ละภาพนั้นเต็มไปด้วยความรู้สึกต่าง ๆ ที่ฉันได้เคยไปเที่ยวพร้อมกับเพื่อนของฉัน

ในช่วงหนึ่งของการใช้ชีวิตที่นี่ ฉันได้ตัดสินใจทำงานพาร์ทไทม์ที่ร้านขายรองเท้าแห่งหนึ่ง แม้จะมีช่วงที่ยากลำบากและพบกับอุปสรรค แต่ประสบการณ์นี้ได้สอนให้ฉันรู้จักโลกของการทำงาน การสื่อสารกับผู้คน การเห็นคุณค่าของตัวเองและงานที่ทำ ทำให้ฉันได้แง่คิดหลายอย่างที่ทำให้ฉันเติบโตไปอีกขั้น

แม้จะมีช่วงเวลาที่ยากลำบากโดยเฉพะเมื่อถึงเวลาต้องลาจากคนสำคัญ แต่มหาสมุทรแปซิฟิกที่ฉันมองเสมอก็เปรียบเสมือนสายใยที่เชื่อมโยงฉันกับความทรงจำและผู้คนเหล่านั้น วาคายามะสำหรับฉัน ไม่ใช่แค่เมืองหนึ่งในญี่ปุ่น หากแต่เป็นสถานที่ที่มอบความอบอุ่น ความงดงาม และการเปลี่ยนแปลงภายในใจ ทุกครั้งที่ฉันหวนคิดถึงที่นี่ ภาพของผู้คนที่ฉันได้พบจะเป็นสิ่งแรกที่ปรากฏในความทรงจำเสมอ และการค้นพบตัวตนใหม่ของฉันในหลาย ๆ ด้าน ทำให้ฉันไม่รู้สึกเสียใจเลยที่ได้ตัดสินใจมาเป็นนักเรียนแลกเปลี่ยนที่วาคายามะ